

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520273

研究課題名(和文) ブラジルの日本語文学史 同人サークルの形成と民族意識の変容

研究課題名(英文) History of Japanese Literature in Brazil: The Formation of Amateur Literary Circles and Changes in Ethnic/National Consciousness

研究代表者

細川 周平 (Hosokawa, Shuhei)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：70183936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：南米移民が開始して既に1世紀以上が経過し、現在では日本語社会は縮小の一步をたどっている。本研究は日本語活動の重要な拠点である文芸サークルの現在をブラジルとアルゼンチンで観察することを目標とし、数度にわたるフィールドワークを行ってきた。ブラジルではサンパウロとトメアスー(パラ州、アマゾン川流域)のほぼ最後の短詩サークルの句会と接触し、定型詩にこめられた自然描写や郷愁を確認した。アルゼンチンでは唯一の日本語新聞で長く働き、70年代より文芸に携わってきた崎原朝一氏とインタビューし、郊外の日系移民資料館を訪問し、文芸雑誌の所蔵を確認した。

研究成果の概要(英文)：Over one century has passed since the first Japanese emigration to South America started. The Japanese-language community is drastically shrinking today and we attend nearly the last phase of its life. This research is intended to observe the literary activities, hub of Japanese-language community, in Brazil and Argentine. In Brazil I visited Sao Paulo and Tome-Acu (Para) to interview with the amateur haiku poets who are mostly over 80 years old. We discussed the description of nature and homesickness expressed in their pieces. In Argentine, I interviewed Mr. Choichi Sakihara, who had worked for the only Japanese newspaper and the literary magazine for many years. I also visited the Archive of Japanese-Argentine Immigration in the suburbs of Buenos Aires and discovered a dozen of issues of Japanese-language literary bulletins. These will become a basis for the future investigation on the formation and transformation of Japanese culture in South America.

研究分野：移民研究

キーワード：日系移民 海外文芸

1. 研究開始当初の背景

応募者は20年にわたって日系ブラジル文化史を研究してきた。その主な成果は『サンバの国に演歌は流れる』(1995年、中公新書)、『シネマ屋、ブラジルに行く』(1999年、新潮選書)、『遠くにありてつくるもの』(2008年、みすず書房)として発表された。大学院で音楽学を専攻したので、まず歌謡より取り組み、次いで同じく複製芸術である映画に関心を広げた。さらに第三作では前二作で論じた郷愁やアイデンティティの問題を、短詩を用いてより理論的に展開した。そこではポルトガル語の借用、浪曲や弁論大会の台本、日本語の起源をめぐる独創的な幻想も検討し、日系ブラジル人の言語文化の一側面を明らかにした。しかし引用した短詩のジャンルの歴史の中で意味は不問に付し、内容だけを検討した。文学作品を素材にしたが、文学研究ではなかった。本計画はその延長で言語芸術としての文学を論じることを目指した。

本計画は外地の日本語文学研究という大きな枠で捉えることができる。この分野では旧満州、朝鮮、台湾、東南アジア、南洋の旧植民地、勢力圏について、最近では目覚ましい成果が上がっている。帝国主義的なイデオロギー、異国趣味的ないし侮蔑的な他者像、現地の出版界の成立、日本人と現地人に対する日本語教育との関連、本国より派遣された文学者の行動と言動、現地人の書いた日本語作品などが明らかにされている。国際的な共同研究も多く実施されている。北米の日本語文学についても、数多くの先行研究があり、移民社会の拡充と戦時下の危機、アメリカ人意識や風土、二世観、注目すべき俳人や小説家などについて論じられてきた。主要な文芸同人誌は復刻され、読者・研究者に裨益している。しかしブラジル移民については、学術研究などが先行し、文学研究はひとつもない。その欠落を補うことを目指す。

2. 研究の目的

北米には内村鑑三や永井荷風をはじめ数多くの文学者・知識人が渡航し、在米中に邦字新聞や雑誌に文章を発表している。その媒体の性格や発表の経緯の研究から、移民文学への関心が湧き上がってくるのは理にかなっている。また戦時中の収容所が政治的賠償問題と絡んで1980年代から脚光を集め、鉄条網の中の出版物に注目が集まった。そこにも文学サークルがあり、その指導者や参加者の文学歴をたどって新聞投稿欄や同人誌が掘り起こされた。

これに対して、ブラジルはこのような学術的刺激がなく、文学は研究者の関心の外に打ち捨てられてきた。移民研究が増えた70年代には、文学活動は高齢化により、低調期に入り、社会学者・人類学者はただの趣味活動と見るだけで、学術的な意欲をそそることはあまりなかった。

本計画はブラジルの日本語文学の展開を

同人サークルと出版メディアの発展、ならびに表現された日本人意識(民族意識)の変容から論じることを目的とする。外地の日本語文学研究として、南米最大、最長の日本語共同体を持つブラジルの文学史を試みる。文学は移民文化の重要な一分野で、ブラジルでは1910年代から記録されている。それは本国の文学と連動しながらも、異なる言語やメディアの環境のために、独自の展開をとげてきた。表現内容や書き手の自己意識が異なることもいうまでもない。孤立した環境であるが故に、かえって近現代文学の特色を映し出している。最近注目を集めている戦前の外地文学と比較するに値する。本計画はそのための基礎知識と歴史的枠組みを提供することを旨とする。

3. 研究の方法

基本的な作業は文学作品の発掘と読解、関係者のインタビューに尽きる。発表メディアは大きく新聞、一般雑誌、文芸同人誌、単行本に分けられる。それをしらみつぶしに読みつつ、現存する書き手集団と接触し、なるべく多くのインタビューを取る。本国の文芸思潮との対比を考えつつ、外地独自の文化状況を考慮する。限定された情報からどのように本国を想像するのかという点を考える。

4. 研究成果

素人文芸を研究するため、「文学する」という動詞を定義した。これには書かれたテキスト自体より、文学を書く、発表する、読む、批評する、出版するなどの活動が含まれる。これは「文学の場」(ピエール・ブルデュー)を参加する個人の活動から議論することを意味する。そのうえで日系ブラジル文学が外地の日本語文学と日系ブラジル文化の軸の学際的交差点に位置することを出発点に、前者で見ると、南米で初の通史的試みであり、後者で見ると人類学的な視点から文学活動を体系づけた。

文学史の標準的な方法に則って、ジャンル別に歴史を記述することが第一の目標とした。俳句については『木蔭』『朝蔭』『蜂鳥』、短歌では『椰子樹』、川柳では『ブラジル川柳』が基本雑誌で、ほぼ全巻を読破した。『農業のブラジル』(1929-1936)と戦後の『よみもの』(1948-1953、同史料館所蔵)の川柳欄を生活と心情の記録としてタイプ分けした。主要文芸誌『コロニア文学』(1966-76)、『コロニア詩文学』(1980-98)、『ブラジル日系文学』(1999-継続)の掲載の全小説(約470作)、パウリスタ文学賞(1956-1991)、農業と協同文学賞(1960-1971)、のうそん文学賞(1979-継続)の受賞作(計360作)の約830作を読破し、出版事情にもとづく年代記を書いた。

それをもとに物語論的類型を打ち立てた。主人公のタイプ(一世/二世、稀に日本人旅

行者か非日系人) 語りの位置(神の視点/一人称の視点、私小説)、非日系人のタイプ(男/女、善人/悪人)、その関与のタイプ(雇用者/隣人、友人/敵対者、恋愛・結婚相手など) 主な舞台(都会/農漁村)、物語の核モチーフのタイプ(恋愛・結婚・不倫、親子か夫婦か兄弟の争い、土地争い、勝ち組負け組抗争、異民族接触、出稼ぎなど)などを指標とした。

大量の雑誌から本国の新しい文学潮流を知り、活発に文学サークルを組織し、1920年代よりブラジル移民独自の文学の樹立を求める声が上がっていた。北海道や旧満州や北米でかつて提唱された「開拓文学」や「移住地文学」として、「植民文学」と総称され、日本から最も遠く、熱帯気候という特異性を強調した。この概念をめぐる議論や実作は、本国の延長でありかつ切断でもあるという外地の文学の特異性を如実に語っている。移民のインテリ層の気負いも強い。

俳句界ではハワイや台湾の俳句界と同じように、ブラジル季語が議論され、短歌界では風土をどう描くかが問題になった。季語ではさらにサンパウロ付近とアマゾン付近では異なると地域性が主張された。「常夏」ではあっても生活のさまざまな場面に四季を見出すことが良き俳句とみなされた。農業移民が大半を占めたことから、日本の農民文学との接点が題材にはっきり見出された。

戦後もまた引き続き移住者が渡ったのは南米だけで、「戦後文学」の影響を受けた作が50年代から現われている。60年代には前衛短詩の波も一時受け、工業移民の増加で、小説の題材も変化した。戦前と戦後の両方を見ることができる点が、ブラジルの日本語文学の特徴で、永住意識で渡った戦後移民の日本観は戦前移民と異なることが、小説の題材にもよく表れていた。

日系ブラジル文化全般から見ると、素人集団としての文芸サークルは、日本人会、各種日系人協会と共通する点が多い。カラオケ組織で観察されたことだが、集団の目的(日本語文学執筆)に対する熱心さの度合いはさまざまで、消極的な書き手が裾野には広がっている。そこまで含めた文学界の考察は、従来の作品評価・鑑賞主体の研究からは外れていた。

またブラジル独自の出来事である終戦直後のいわゆる勝ち組負け組抗争についての小説が散見でき、民族的トラウマとなった事件についての「現場報告」や反省から、「海外同胞」から「日系ブラジル人」になる過程を分析することができるだろう。また抗争の後には、全般に永住意識が定着したと人類学・社会学は述べている。文学からもこのアイデンティティの変遷を追うことができる。ブラジル移民自身の文学的に昇華された表現から意識や社会の変遷を論じる試みは、インタビューや公文書や社説などから追ってきた従来の研究に厚みを加えた。

最終年度にはアルゼンチンを訪問し、同国で現存する唯一の日本語新聞『らぶらた報知』編集部にて読者層についての聞き取り調査を行い、同紙に長く勤め文芸活動を支援してきた崎原朝一氏と対面調査を行った。郊外の日系アルゼンチン移民資料館にて、文芸誌を閲覧した。アルゼンチン一世の文学作品中唯一の長編小説、増山朗『グワラニーの森の物語』をモデルとなった家族の現実と照らし合わせる考証を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

細川周平、ペルーとブラジル日系移民史料館所蔵資料について、『人間文化研究情報資源共有化研究会報告書5』2014、79-83

細川周平、南米雄飛を求めて、細川周平編『コレクション・モダン都市文化 第93巻 南米への移民』ゆまに書房、2013、653-81

細川周平、沖縄系ブラジル二世作家、山里アウグストの『空想解脱小説』、郭南燕編著『バイリンガルな日本語文学 多言語多文化のあいだ』三元社、2013、394-99(査読なし)

細川周平、安良田済さんの『戦時下の日本移民の受難』を読んで、『ブラジル日系文学』38号、2011、48-51(査読なし)

〔学会発表〕(計6件)

細川周平「講演 アルゼンチン一世の文芸活動 増山朗『グワラニーの森の物語』を中心に」サンパウロ人文科学研究所(ブラジル)2014年7月10日

細川周平「講演 Estudios sobre literature Nikkei brasileira y argentina」アルゼンチン国立ラプラタ大学国際関係学科(アルゼンチン)2014年7月7日

細川周平「講演 La Literatura Nikkei Brasileira」アルゼンチン国立ミシオネス大学(アルゼンチン)2014年7月4日。

細川周平「講演 ブラジル移民の文学」サンパウロ人文科学研究所(ブラジル)2013年4月2日

細川周平「講演 A literature dos imigrantes japoneses no Brasil」サンパウロ大学日本文化館(ブラジル)2013年4月1日

細川周平「講演 ブラジルの日本語文学 松井太郎を中心に」尼崎市中小企業センター、兵庫県阪神シニアカレッジ(兵庫県・尼崎市)2011年1月14日

〔図書〕(計2件)

細川周平『日系ブラジル移民文学1 日本語の長い旅 歴史』みすず書房、二〇一二年二月

細川周平『日系ブラジル移民文学2 日本
語の長い旅 評論』みすず書房、二〇一三年
二月

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細川 周平 (Hosokawa, Shuhei)
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：70183936

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：